

吉田修一

タイム・

アフター・

タイム

タイム・

アフター・

タイム

本PDFは立ち読み用サンプルとして公開されたものです。
本文・画像・デザイン等の無断転載、複製、配布、改変、
インターネット上への掲載を禁じます。

装丁
アルビレオ

装画
岡田菜美

目次

第一章 夏を奪う者 7

第二章 見延一真 十八歳／サーファー 52

第三章 晩夏のかなしみ 96

第四章 久遠誠治 二十一歳／無職 138

第五章 裏切りの秋空 180

第六章 平出凧沙 十六歳／高校二年 223

第七章 真冬の決心 265

第八章 比嘉丈雄 四十二歳／元世界フライ級チャンピオン

308

第九章 越冬クジラ 350

第十章 始まったんだ、夏 395

第十一章 月夜の卓球台 439

第十二章 オツソーと久遠 486

エピローグ 528

第一章 夏を奪う者

炎暑日の終わりに夕立がきた。重い雨雲が道端に落ちてきたようだった。

雷雨の中、スーツの上着を傘代わりにした男が二人、悲鳴とも歓声ともつかぬ声を上げながら公園内から走り出てくる。

「わぁー、管理事務所に戻ろうか？」

ずぶ濡れで叫ぶのは、尾崎颯である。

「もう遠いつて！ ひゃー、走れ、走れ！」

そのあとを同僚の野上洗一が追ってくる。

さつきまで草いきれでむんむんしていた芝生から冷えた土の臭いがする。

二人がやっと走り出したのは、東八と呼ばれる幹線道路で、片側三車線の道路をまるで遊園地のアトラクションのように高い水飛沫を上げながら多くの車は走っていくのだが、通行人はおろか、雨宿りできそような建物もない。

場所は、都心からは離れた都立多摩公園で、界限にあるものといえ、府中運転免許試験場か多磨霊園くらいである。

「とにかく試験場のバス停まで！」

「そうタイムリングよくバス来るか？ それまで二匹のおっさんトロロじゃん！」

「野上、トロロ、見たことないだろ」

野上のくだらぬ譬えに、思わず尾崎も笑ってしまう。

そもそも、あまりの雨の激しさに、二人して怒鳴り合っているのか笑い合っているのかさえ分からない状況である。

「タクシータクシー。タクシー呼ぼうぜ」

尾崎がスマホを出そうとするが、濡れたポケットからなかなか出せない。

「こんな所、タクシーなんて走ってないって！」

「じゃどうすんだよ！」

尾崎がやつとスマホを引っ張り出した時である。

「ああ！」

野上が指差した先に、空車のタクシーが走ってくる。

「停まれ！ 乗りまーす！」

二人はちょうど青になった横断歩道に駆け出した。が、次の瞬間である。

反対側からも、女が二人、

「乗りまーす！ 乗りまーす！」

すでに複雑骨折した一本のビニール傘を、律儀に二人で差して走ってくる。

とにかく激しい雨である。稲光だつて近い。近いだけでなく、次は確実に自分たちに落ちそうである。

最初に空車のタクシーに駆け寄ってドアに触れたのは、尾崎だった。

運転手と目が合う。タクシーのワイパーがブンブン振れている。ずぶ濡れの尾崎を見て、運転手の顔が曇る。そりやそうである。しかし次の瞬間、バン、バンバン、と次々に手のひらが濡れた車体を叩く。

野上と、反対側からの女二人である。

「乗りまーす！」

複雑骨折した傘を握っている女が叫ぶ。

「俺らも乗りまーす！」

負けじと野上^が声を上げる。

さすがに不憫^{ふびん}に思ったのか、運転手がドアを開けてくれる。その僅^{わず}かな隙間に四人が一斉に手を突っ込む。

「ちよっと待った！」

野上が浅ましいみんなを制するように叫ぶ。その口にも雨が流れ込む。

「……ここは、仲良く相乗りしませんか！ どうせ最寄りの駅とかでいいんでしょ！」

野上の提案に、女たちが一度顔を見合わせる。おそろく互いのずぶ濡れの様子に、自分の現状を見たはずである。

「じゃあ、そうしましょう。先に見つけたのは私たちの方だったけど」

一言ありそうだが、とにかくまず一人目が乗り込む。

「じゃ、俺が前に」と、尾崎は助手席のドアを開けた。

「じゃ、ほら、先に先に！」

野上がもう一人を乗せようとするが、この期に及んで瀕死のビニール傘を畳もうとする。

「それ、いいですつてもう！」

耐えかねた野上が先に乗り、そのボロボロの傘を引つ張つて、もう一人の方も引きずり込む。

とにかく、慌てているし、濡れた靴は滑るし、役に立たない傘は邪魔だしで、後部座席はちよつとした乱闘騒ぎである。背後からクラクションを鳴らされ、タクシーが走りだす。

「どちらまで？」

客が乗つただからそうなるのだが、あまりのテンションの違いに、どつと車内に笑いが起こつたのはその時である。

「とりあえず、ここから一番近い中央線の駅に向かつてもらえますか」

笑いを堪えて尾崎が運転手に告げた。濡れた体が冷房の風で急激に冷える。

「ここからだ、東小金井駅ですかね」

「じゃそこで。あの、そちらもいいですよね？」

尾崎は後部座席に声をかけた。

「はい、私たちもそこで大丈夫です」

どちらかは分からなかったが声が返ってくる。

「運転手さん、今さらだけど、本当にごめんなさい。こんなずぶ濡れで乗り込んでやって」

こちららもどちらかは分からない。

「横断歩道を両側から走ってくるお客さんたちの形相を見た瞬間、もう逃げられないって覚悟決めましたから」

そんな運転手の言葉にまた笑いが起こる。

「でもそれで言ったら、こっちこそすいません。こんなずぶ濡れのおつきさんと相乗りしてもらって」

ここに来て、やっと野上も平常心を取り戻したようで女二人の間で小さくなっている。

「だって、こんな雨ですよ。相手がゾンビでも相乗りしますって」

そう答えたのは、先に乗り込んだ方である。

「あ、ゾンビといえば、さつき一瞬ヒヤッとしたんですよ」

野上が笑いだす。

「……だって、多磨霊園から稲光の中をずぶ濡れの女の人_が駆け出てくるんだもん」

「あー、確かに怖いかも」

受けたのは、まだ瀕死の傘をちゃんと畳もうとしている方である。

「あの、ちよつといいつすか？」

この辺りで尾崎も口を挟んだ。

「……その傘なんですけど、複雑骨折で再起不能だと思っただけなんですけど」

尾崎としては二人を笑わせようとしたのだが、なぜかしらつとした空気が流れる。

「あー、それ、もうさつき笑っちゃったやつ。土砂降りの中で」

「複雑骨折？」

「そう、それ」

「恥ずっ」

尾崎は振り返った。奥に座った女と初めて目が合う。

「え？」

次に二人の声が揃った。

「オッソー？」

先に口にしたのは、女の方である。

「久遠……」

すぐに尾崎も続く。

「えー……」

また二人の声が揃う。

「何？ 何何？ オッソークオン？」

狭い車内で大声を出す尾崎たちを、野上が訝しがる。

「え？ 知り合い？」

「うん」

野上の問いに、二人同時に答える。

尾崎は改めて久遠を見つめた。よくよく見れば、目も当てられないようなずぶ濡れの姿とはいえ、気づかないのがおかしいくらいに昔のままである。

「高校の同級生」

また二人の声が揃う。

もちろん尾崎も久遠もお互いの連れに伝えたのである。

「へー、そんな偶然あるんだ」

野上が呟く。

「ねー、びっくり」

「俺がびつくりだよ」

二人はまだ互いを見つめ合っていた。

「オッソーって？」

割り込んできたのは、もう一人の女である。

「ああ、この人、尾崎颯っていうの。だから、オッソー」

「ああ、なるほど」

次に質問してきたのは野上で、となるのが普通なのだが、なぜか口を挟んできたのは運転手で、

「じゃあ、クオンさんは？」

「えっと、久しく遠いで、久遠、です」

尾崎もなぜか運転手に答える。

「ああ、そっちでしたか。いや、私の嫁が韓国人でクオンみょうじって苗字だったもんですから」

「ああ」

車内全員の声が揃う。

さらに雨脚が強くなった。最速で動くワイパーでも間に合わず、水の中を進んでいるようである。

「なんか恐ろしいくらいの雨ですよね」

野上がそう呟いた途端、すぐ横で稲光が走った。

「ぎゃっ！」

「うわっ！」

一番の悲鳴を上げたのは、運転手だった。

酷暑である。

朝の八時にはすでに三十度を超え、午後一時を回った今、照り返しの強いここ新橋の歩道は、おそらく四十度近くになっているはずである。

「しっかし、暑いな」

横で犬のようにぜえぜえと舌を出しているのは野上である。

「もうちよつと行けば、地下道に入れるよ」

そう励ます尾崎とて、汗腺がバカになったような大汗である。

「コンサルの日榮さんとの約束、三時半だったよな？」

野上に訊かれ、

「とりあえず駅で昼メシ済ませとこう」

尾崎は歩調を早めた。

「なあ、尾崎、時間あるしさ、さくつとサウナどう？ 水風呂入って、サウナの食堂で昼メシ」

「あ、いいかも。今夜の接待までまだ一日長いしな。賛成」

タイミングよくすぐそこに安そうなサウナの看板がある。野上もこの看板を見ての提案だったらしい。

二人は吸い込まれるように、その雑居ビルに入った。

熱した体を水風呂で冷やした二人は、やけにサイズのかいサウナ着で、地下の食堂に入った。

老舗しにせのサウナらしく、食堂は畳敷きで、これでこのあと仕事がなければ、目の前のポスターにある冷えたビールを一气飲みたいところである。

二人が注文したのは日替わり定食で、生姜焼きしょうがも唐揚げも少し味が濃すぎたが、付け合わせの切

り干し大根がよく味が染みていて旨い。

その切り干し大根をほぼ一口で食べた野上が、「あ」と、声をもらす。

「……そういえば、久遠さんから返信きた」

尾崎は不意に出てきた久遠の名前に、「え？」と箸が止まった。

「この前、名刺交換したろ。で、まあ、お互いひどい目に遭いましたねえ、みたいな、もしよかつたら、今度みんなでごはんでも行きませんかあ、みたいな、やりとりしてて。そしたら、今朝、行きましようつて。ゲリラ豪雨のなさそうな日につて」

聞き終わると、尾崎は生姜焼きを頬張った。そして、告げた。

「久遠、結婚してるよ」と。

「え！ でも、結婚指輪してなかったぞ」

野上がひどく慌てる。

「よく見てるな」

「この年の独身男つてのは初対面の女に会ったら、まずそこ見るの」

「そんなもん？」

「違うの？」

先日の再会が高校以来、二十年余ぶりというわけでもなかった。同窓会などにはお互い参加するタイプではなかったが、その間に共通の友人の結婚披露宴で一度、また五年ほど前にも、やはり恩師の葬儀で顔を合わせ、ほんの少し言葉は交わしていた。

「子供は？」

ふいに野上が訊いてくる。

「さあ。でも、俺が聞いている範囲だといなかったと思う」

「離婚したとかない？」

「なんで？」

「いや、なんとなく」

「俺も詳しくないよ。でも、確か旦那さん、植物の研究してる人」

「大学の先生とか？」

「いや、世界中の珍しい木とか果物とか探してきて、輸入関係？」

「へえ、そんな仕事あるんだな。……あ、でも、もらった名刺に久遠愛^{あい}って。ああ、でも、今どき

旧姓使うか」

あの日、どしゃぶりの中、タクシーは東小金井駅に着いた。きつちりと料金を四等分している間、なんとなく仕事の話になった。すると、偶然とは重なるもので、「そういえば、なんであんな所ですぶ濡れになってたの？」と尋ねる久遠に、野上が、「今度、あそこの都立多摩公園に美術館を建てることになって、うちら建設会社なんですよ」と答えたところ、「え！ 私たち、その美術館のPRから運営まで請け負ってる代理店で……」と、久遠が目を丸くしたのである。

本来この段階から広告代理店が絡んでくることはない。ただ、今回の案件は都立公園内を民間企業が借り受けて美術館を運営するという全国でもかなり特殊な例となる。

「なーんだ、じゃあ、遅かれ早かれ顔合わせてましたよね」と野上。

ちなみに久遠の隣でまだボロ傘を元の形に戻そうとしていたのは、一緒にチームを組んでいる梅^{うめ}本潤子^{もとじゆんこ}である。

「あー、また灼熱地獄に逆戻りかあ」

サウナで日替わり定食を平らげた尾崎は、その場で背伸びした。そのまま立ち上がろうとすると、「なあ」と、野上が呼び止める。

「ん？ そろそろ出ないと」

「あのさ、先に一っだけ確かめていい？ 久遠さんって高校の頃、絶対モテたよな？」

「なんで？」

「誰でもそう思うって」

「まあ、でもちよつと口悪いんだよ」

「ああ、それはなんとなく、この前、感じた。……あのさ」

野上がここに来て、なぜか神妙になる。

「……尾崎と久遠さんって、何かあったりしたの？」

「なんで？」

「いや、なんでってこともないんだけど。オッソー、クオンって」

「ないよ」

「だったら言うけど、俺さ、彼女、ドンピシャなんだよね。でも、もし尾崎がなんか嫌な思いするんだったら、先に言つてほしいなって。というか、俺、マジで尾崎に恩を感じてるからさ。お前だけは裏切りたくないみたいな」

異業種の会社で働いていた野上を、今の会社に引っ張ってきたのは尾崎である。まだお互いに新人だった頃、とある営業職の研修で知り合い、なんとなく馬が合って、その後も付き合いが続いていたのである。

「だから、久遠、旦那がいるって。って言うか、美大生のなんとかちゃんはどうしたんだよ」
尾崎は呆れたように食堂を出た。

二人は狭いロッカー室で手早く着替えた。野上が左胸に貼られた肌色のシールを剥がす。濡れているので皮膚が引つ張られるらしく、「痛たたた……」と、大げさに顔を歪める。

シールの下には、五芒星のタトゥーが隠れている。陰影のあるシンボルマークで、野上曰く、五芒星には人生の道しるべ、正しい方向に導くという意味があるらしい。

ちなみに、野上が左胸にこのタトゥーを入れたのは、今年の元日である。

尾崎は、それを会社の同好会でやっているバドミントンの練習後に知った。体育館の隅で着替えていた時である。

「何、それ？」

思わず尾崎は尋ねた。

「あつ、そうだ。忘れてた」

野上が慌ててタオルで隠す。

「何、それ？」と、尾崎は繰り返した。

「だいぶかゆみが取れてきたから忘れてたよ」

「え？ 本物なの？ シールじゃなくて？」

「シールなんか、こんな年になって貼るかよ」

「いやいや、こんな年になって本物なんて尚更ないだろ」

ちなみに、野上が年甲斐もなくタトゥーを入れた顛末は次のような流れである。

今年の正月、野上はかねてより親しくしている花乃ちゃんと初詣に出かけた。行列に一時間近く

も並んでいるうちに退屈しのおきの会話から、今年はなんか新しいことにチャレンジしたいよね、という流れになった。

「花乃ちゃんは、何か挑戦してみたいことあるの？」

「え？ 私？ あったかなあ……」

自分で言いだしたくせに、会話の行き先が決まっていないうつものことらしく、野上はそんな彼女の横顔を微笑ましく眺めていた。

花乃ちゃんはテキスタイルを学ぶ美大生である。尾崎も何度か会ったことはあるのだが、偏見を恐れずに言えば、絵に描いたような美大生の女の子で、ハロウィンの魔女のようなマントを着ていることもあれば、膝まである赤いエナメルブーツを履いていたりもする。

一方の野上が、絵に描いたような男子校野球部出身なので、二人が並んでいると、カレーと蕎麦みたいなのだが、「富士そばにそのセットあるじゃん」と、野上は気にしていない。

ただ、尾崎が言うカレーは独特なスパイスを使って南国の花で飾られたキーマカレーで、やはりその隣に、ぶつとい田舎蕎麦は似合わない。

とはいえ、見かけが不似合いだからといって、外野がとやかく言うことでもない。だが、野上と花乃ちゃんの場合、他にも何かと気になる点が多い。まあ、年の差は今どきそう気にする必要もないのだから、片や青春真っ盛り、片や転職したばかりの中堅社員となると、その足並みを揃わせるのはなかなか難しい。

「野上、寝てない？」

「分かる？」

ある時、尾崎は目の下に濃い隈を作って出社した野上を呼び止めた。

「昨日さ、花乃ちゃんと夜中の三時くらいまでクラブにいて。とりあえず始発で帰って、ちよつとだけ寝て、今ここ」

「学生じゃないんだからさ、平日だぞ。それ、きついつて」

「いや、俺だって分かってんだよ。分かってんだけど、一緒にいると、あつという間なんだもん」
「なんだもんって……」

「俺さ、朝帰りなんて学生以来だよ。働くようになってからなんて、何もなければ十時には布団に入ってた退屈な男だぞ。だから楽しいんだよ、なんか。体の細胞がさ、全部『楽しい！』って叫んでるみたいなんだよ」

野上が花乃ちゃんと知り合ったのは、近所の小料理屋である。当時、花乃ちゃんはバイトで入っており、花乃ちゃんファンの客も多かったという。

そのうち、花乃ちゃんを囲む食事会などが始まった。花乃ちゃん一人に対して、男たちが三、四人。近所に新しいイタリアンができれば訪れ、話に出た映画が始まれば観に行き、たまにはレンタカーを借りて鴨川の水族館にも足を延ばす。

側から見れば、少し奇妙なグループなのだが、小料理屋でのふだんの状況がそのまま延長されているだけなので、本人たちにはさほどの違和感もないらしい。

ちなみに男たちの中には、大学生もいれば、野上よりも年上の大学講師もいるという。で、話は今年の初詣の場面に戻る。

「あ、私、やってみたいことあった。ずっとやりたかったけど、なかなか勇氣出なくて。でも、野上さんだったら、できるかも」

あとほんの少しで賽銭箱さいせんばこに到着するタイミングだった。

「何？」と、野上は花乃ちゃんに尋ねた。

「一緒にタトゥー入れようよ」

野上曰く、人間というのあまりにも予想外の方から球が飛んでくると、本能で思わずナイスキヤッチしてしまうものらしい。

「それで、それ？」

尾崎もさすがに言葉がなく、まだ痛々しい野上の胸元の五芒星を改めて見た。

「そう、それでこれ」

照れ臭そうに野上が頷く。

「……いや、分かっているよ、そんなの。言われなくたって、正式な彼女でもないし、他にも俺みたいな男がいるんだろうしさ、もっといえば、たぶん遊ばれてるだけだと思うよ。でもさ、初詣だぞ。それも二人きり。なんか、期待しちゃうじゃんか」

野上が一気に吐き出す。きつと自分でもいろいろと分かっているのである。だからこそ、こんなにも苦しうなのである。

沈黙が続いたあと、

「笑うなよ」

野上がいよいよ恥ずかしそうに、まだ痛々しい五芒星を手のひらで隠す。

「笑わないよ」と、尾崎は即答した。

「……似合ってるかどうかっていったら微妙だけど、でも、別に笑わないよ」と。

胸から少しだけ手のひらを離し、五芒星を覗き込んだ野上が、「ありがと」と笑う。

「……そうだよな、尾崎は笑わないよな。尾崎って、こういうの、笑わない奴だよな」

「でも、ごめん。帰り、急に思い出して、電車の中で吹き出すかも」
なんとなく神妙になった空気を尾崎は笑い飛ばした。

「いいよいよ、俺がない所だったら、いくらでも笑え。どうせ聞こえないし」
「はい、ポーズ」

尾崎はカメラを向けた。

「いいって」と照れながらも野上がボディビルのポーズをとる。

翌日、久遠たちとの食事の日取りが決まったという連絡が野上から早速届いた。

「携帯、鳴ってたよ」

風呂から出た尾崎に妻の美南みなみが教えてくれる。

見れば、次の三連休の初日で、平日は相手方の仕事の終わりが読めないからだという。

尾崎は、「今度の三連休、久しぶりに秩父行かない？」と声をかけた。ほとんど無意識だった。

秩父は美南の実家がある。

冷蔵庫からビールを出して、冷やしておいたグラスに注ぐ。

ダイニングのいつもの席に座り、「休日出勤、お疲れ〜」と、自分で自分をいた勞る。

「秩父？ どうしたの急に？ この暑い中、畑仕事やらされるよ」

美南がゴーヤの炒め物を出してくれる。

「一日だけ手伝って、あとは子供たち連れて、川に行けばいいじゃん」

「まあ、お父さんたちは喜ぶだろうけど」

「それこそゴーヤもらってさ。あ、あとトウモロコシだよ。あの甘い。ちょうど今じゃない？」

そこに自室から今年八歳になる息子の海斗が出てくる。

「お父さん、今日土曜だからゲームあと三十分だけやっていい？」

すでにパジャマに着替えているが、上着のボタンが二つもずれている。

「お前のその粘り強さ、将来、絶対に何かの役に立つと思うよ、お父さん」

「え？」

「何が、『え?』だよ。毎週毎週、初めて聞きますけど、みたいな顔してさ」

「ダメ？」

「だからダメだって」

「じゃあいい」

粘るわりには、諦めは早い。

自室へ戻ろうとする海斗に、「海斗、今度の休み、秩父行く？」と、尾崎は尋ねた。

「行く行く！」

途端に機嫌が直り、ダイニングに戻ってくる。

「一日目は畑の手伝いして、次の日からは川でキャンプ」

「僕がドライブコースとか休憩するパークキングとか決めていい？」

すでに楽しげな海斗に、台所から美南が、「あんたスイミングは？」と、声をかけてくる。

「休むよ。記録会ないし」

海斗が自室に戻ると、大皿の麻婆豆腐マゼドを運んできた美南が、「仕方ない。行くんなら持てるだけ

野菜もらってこよつと」と、ドンとテーブルに置く。

山椒さんしょうの香りがツンと鼻にくる。

麻婆豆腐を平らげると、もう一度風呂に入った方がいらい汗だくになった。それでもタオルで汗を拭いながら、汚れた皿を食洗機に突っ込んでいく。

「この鍋、食洗機いいんだっけ？」

尾崎は、エアコンの風の下で洗濯物を畳んでいる美南に尋ねた。

「ごめん、それ手洗い」

「オッケー」

「そっち暑い？ 扇風機回す？」

「大丈夫」

いったん食洗機をスタートさせたところで、野上からの返信がある。さつき三連休は予定があるから久遠たちとの食事に参加できないと送っていたのである。

『三連休、予定なしって言ってたろ？』

『ごめん、嫁の実家に行くの忘れてた』

『秩父？』

『そう。ごめん』

その辺りまで続けたところで、畳んだ洗濯物を抱えた美南が近づいてくる。

「さつきから誰とピコピコしてんの？ 仕事？」

「野上」

「ああ、野上さんと今度同じチームになったんでしょ」

「そうそう。あいつがうちに来て初めてだから、なんか仲良いんだよ」

「前の木場さんだっけ？ 合わなそうだったもんね」

「何が気に入らないのか、明らかに俺のこと嫌いオーラ出してくるからさ。やりづらかった。最後まで理由分かんないし。まあでもその反動で野上とは仲良しこよしだよ」

そう笑う尾崎の話を最後まで聞きもせず、美南は洗濯物を各部屋に運んでいく。

『去年もらったトウモロコシ、めっちゃ甘かった』

『またもらってくるよ』

『じゃ、延期？ 久遠さんたち』

『行けば。誰か別の奴、誘えば』

『それヘンだろ。でも了解』

そこで野上からの連絡は途絶えた。

尾崎は皿洗いに戻った。焦げた麻婆豆腐がこびりついた土鍋をたわしで擦る。ふと汗が引いているのに気づいて見ると、いつの間にか、美南が扇風機をこちらに向けてくれていた。

「あら、帰ってきた？ 颯さんも海斗くんも暑かったでしょう。先にお風呂お風呂。水風呂みたいなぬるくしてるから」

畑仕事から戻った尾崎たちを、ちよつとした旅館のような玄関で迎えてくれるのは義母の梶原妙子である。

美南の実家は古くからの農家で、広い敷地には天守閣のような屋敷が建っている。

「お義母さん、先にもいできた野菜だけ、車に乗つけちゃいますから。海斗だけ風呂に入れてもらえますか？」

ファン付きの作業着は着ているが、頭から顔から玉のような汗である。

「そんなの、私が車に運んどくから」

「いやいや、それだけ僕がやりますから」

「まったく、颯さん、せっかくのお休みなのに。畑なんか出なくていいのよ」

尾崎はとりあえず海斗だけを預けて外へ戻った。幸い、雲が多い日で、風もある。

尾崎は大きな段ボール箱三つ分もいできたトウモロコシやゴーヤや茄子を、軽トラから自分の車の荷台に載せ始めた。

しばらくすると、義父と義兄がそれぞれ運転するトラクターが敷地に入ってくる。

「尾崎くん、そんなの俺が移しとくから、先に風呂入んなよ」

トラクターの上から義兄の桔平が声をかけてくる。

「いや、もうこれで終わりなんで」

停車したそれぞれのトラクターから二人が降りてくる。

「尾崎くん、まだまだ体力あるなあ」

義父の哲郎が頼もしそうに微笑む。

「さすがにもうへばりましたけど、今どき都心の夏を生き抜いてる営業マンを舐めてもらっちゃ困りますよ」

「らしいね。暑さ、きつついんだってね」

そう言いながら義兄が農具を納屋に運んでいく。ちなみに義兄の桔平は婿養子である。

美南は、四歳上の姉、真朝との二人姉妹で、義父たちは後継ぎがなければ、将来的には離農するつもりでいたのだが、トヨタのディーラーで働いていた桔平が真朝との結婚を機に、後を継ぐこと

になった。

二人には中二、小六、小三になる三人の娘たちがいる。実は義父の哲郎も婿養子で、この梶原家は代々女系家族である。

夏場、この梶原家では、まだ日の高いうちから夕食が始まる。朝の涼しいうちに農作業を始めるためだが、すでに六時前には、全員が風呂も済ませて食卓に集まってくる。

「颯くん、そっちに扇風機回してね」

義姉の真朝が忙しなく座敷と台所を行き来している。

三つ並べた座卓には夏野菜の料理や刺し盛り、さらに梶原家定番の豚の角煮が大皿で供される。

「こっち涼しいですよ」

台所に戻る真朝に、尾崎は応えた。実際、エアコンからの強風で少し寒いほどである。

「じゃ、先にほら」

義兄の桔平が缶ビールを渡してくれる。みんなで乾杯というわけでもなく、桔平が旨そうにゴクリと飲み、上座にいる哲郎もすでに焼酎の水割りを飲んでいる。

「いただきます」

尾崎もビールを注いで一口飲んだ。数時間の農作業で心地よく疲れた体に、冷えたビールが染み渡っていく。

「尾崎くん、メシ食ったらカラオケ行かない？」

桔平が誘ってくる。

「この前のスナックですか？ いいですよ」

桔平の携帯が大きな着信音を立てたのはその時で、すぐに何やら返信している。

台所から戻ってきた真朝が早速その様子に、「こんな時間に、誰？」と尋ねる。

「農協の島崎さんだよ」

「ほんと？ 颯くん、ちよつと確かめて」

「え？」

真朝に頼まれた尾崎は苦笑いした。

「だって、颯くんをスナックに誘った途端に連絡があるなんて、ヘンじゃない」

そう勘繰る真朝の背後から美南が顔を見せ、「ちよつと、やめてよ」と口を挟んでくる。

「だって、うちの人は前科者だから」

真朝の口調は柔らかいが、目は笑っていない。

「子供たち、降りてきちやうから。お姉ちゃん、やめてって」

呆れ果てたような美南に、「子供たちの前でも、普通にこの話するもん」と、真朝はしれつとしたものである。

「ほら」と、桔平がスマホの画面を尾崎に見せたのはその時で、確かに「農協・島崎」とある。

真朝も本気で尾崎に確認させたかったわけではないようで、「さっ、私たちも食べよつか」と、

席に着いたかと思うと、今度は、「亜子ー！ ごはんよー！ みんな連れてきてー！」と、体を廊下の方に振って二階に声をかける。

この真朝と美南を見て、姉妹だと思える者はほとんどいないのではないだろうか。姉の真朝は母親似で、どちらかという頑丈なイメージである。逆に美南は父親似で、目鼻立ちの通った細面ほそおもてである。

姉妹仲はそう悪くないらしいのだが、顔や雰囲気だけでなく、その話し方や言葉選びなどを見る

につけ、なぜ同じ家で同じように育てられてきて、こうも違ってくるのだろうかと思わされる。美南も決しておとなしいタイプではないのだが、それでも何かと開けっぴろげな真朝の隣にいると、ちょっとしたお嬢様育ちのように見える。

ちなみに、真朝が桔平を前科者と呼ぶのは、もう四年も前になるのだが、桔平がスナックで出会った女性と二人きりで食事に行ったことがあったせいである。

美南の話によれば、それ以上のことはなかったらしいのだが、真朝は根に持っているという。台所から義母の妙子も戻り、大人たちが全員揃っても、まだ子供たちが降りてこなかった。

「亜子ー！ー！」

最後通牒つうていとばかりに、真朝がまた体を廊下の方に振って二階に声をかける。

今度はさすがに子供たちの騒々しい足音が降りてくる。

真っ先に入ってきたのは海斗で、「お父さん、明日、溪流でしょ？ 亜子姉ちゃんは部活だけど、

莉子ちゃんと瑚子こちゃんは今行くって」と、興奮気味である。

「亜子ちゃんの学校のバスケ、強豪なんだってね」

尾崎は尋ねた。

「でも練習めっちゃきつい。私たちも高等部と同じメニューなんだよ」

亜子の短く切った髪はまだ少し濡れている。赤く灼けた鼻が果物のようである。

「いただきまーす！」

美南が運んできたごはんが子供たちに行き渡ると、一斉に食べ始める。

美南と真朝の姉妹は似ていないが、こちらの亜子、莉子、瑚子の三姉妹はそっくりで、まるで夏野菜が並んでいるようである。

三姉妹の食欲に負けじと、いつも以上の速さでごはんを頬張る海斗を、尾崎が眺めていた時である。

「尾崎くん、明日、溪流行くの？」

焼酎ですすでに顔を赤くした義父の哲郎が声をかけてきた。

「車で中洲なかすに降りられるところがあるでしょ？ そこに行こうかと思つてて」

尾崎は梶原定番の角煮に箸を伸ばした。

「最近、急に天気変わるから、気をつけてよ」

そんな哲郎の心配に、「本当にそうよ」と、真朝が口を添える。

「……急にすごい雨になるからね。もうね、この辺、最近ちよつと異常。竜巻警報とか出まくつてるし」

「川もね、ちよつと油断してると、あつという間に水嵩増みずかさすから怖いよ」

そこに桔平も加わる。

「……この前なんて、その雨の中、車で走つたら、その小さな橋あるでしょ、あそこがもう冠水してんだもん。びつくりしたよ」

「ねえ、やめとけば？」

そう声をかけてきたのは美南である。

しかしすぐに哲郎に、

「明日の天気次第だよ。そう気温が上がらなきゃ大丈夫だし。どうせ行くの午前中だろう？」

と訊かれ、「はい、昼ごはん河原で食べて帰つてこようかと思つてて。街道沿いに新しいピザ屋できてるじゃないですか。それ買つて」と尾崎は答えた。

「ああ、あそこ、ちゃんとピザ窯で焼くから美味しいんだって」
真朝である。

会話がピザの話に流れ、溪流行きの中止を心配していたらしい海斗が、ほっとしたように食事に戻る。

「もうお腹いっぱいだろうけど」

スナック潮騒のママが小鉢を出してくれる。八重山かまぼこという石垣島の名産で、常連が土産に買ってきてくれたらしい。

尾崎は、確かに腹いっぱいだったが、一つ摘んだ。甘くフワツとした食感が芋焼酎に合う。

場所は秩父駅に近い歓楽街の一角である。

小さな舞台上でミスチルを熱唱していた桔平がカウンターに戻り、尾崎たちは改めて杯を合わせた。

「尾崎くん、なんか仕事？ さつきからずつと携帯ばかり気にしてるけど」

「あ、仕事じゃないんですけど、同僚から何か連絡くるかなと思って」

十人ほど座れるカウンターは、ほぼ埋まっているが、常連客同士でさつきからママを相手に新しくできた病院の話に夢中である。

ママの横に立っていたバイトの女の子が、「義理の弟さんなんですってね」と、声をかけてきたのはその時で、

「あ、そうか。優香ちゃん、初めてか」

そう受けたのは桔平で、「……俺と違って、シュツとしてるでしょ。都会の男って感じで」と笑

う。

「確かに、この辺にはいない感じかも」

お世辞だろうが、優香も微笑む。

「そうだ、優香ちゃんもずっと東京だったんだよね？」と桔平。

「そうなんですよ。ファッション系の学校出て、しばらくアパレルで働いてたんですけど」

「そうなの？　どの辺で？」

尾崎は尋ねた。

「一番長かったのは青山ですかね」

胸の下が絞られた服のせいか、優香の豊かな乳房が目立つ。

「お勤めはどちらなんですか？」

「俺？　東京、丸の内」

芋焼酎のおかわりを作ってくれる優香に、尾崎は答えた。

「あの辺、あんまり行かなかったなー」

「若い人はあんまり来ないのかな」

「でも、すごいおしゃやれな通りがあるじゃないですか、ライトアップされてる」

二人の会話を聞きながらソングブックを捲めくっていた桔平が、結局また舞台に向かう。

「今日は、代行ですか？」

ふいに優香から訊かれ、尾崎は、「え？」と尋ね返した。

「今日、お車ですか？　それとも梶原さんの奥さんがお迎え？」

改めて優香に訊かれ、「ああ。義姉ねえさんが迎えに来てくれるって言った」と、尾崎は答えた。

「じゃあ、そろそろ？」

優香が時計を見る。十時前である。

美南の実家から、ここ秩父駅まで車で十五分ほどかかる。

「ああ、そうだね。十時ごろって言ってたから」

「じゃ、もう一杯、最後作ります？」

「うん、お願い」

結局、二曲連続で歌った桔平が戻り、喉が渴いたとばかりにウイスキーの水割りを一気飲みする。かなり酔つたらしく、尾崎に桔平が凭もたれるように席に着く。

「お義姉さん、そろそろじゃないですか？」と、尾崎は訊いた。

桔平が壁時計を見上げる。

桔平のスナック通いを許してやるように、真朝を説得したのは義父の哲郎だったらしい。絶対に許さないと言い張る真朝を、「息抜きくらいさせてやれよ！」と、最後にはあの温厚な哲郎が怒鳴りつけたという。

もちろん桔平も反省はしていたので、父娘のケンカのあともしばらく控えていたのだが、半年ほど経った頃、「私が十時ごろ車で迎えに行くから、行けばいいじゃない」と、真朝が折れたらしい。

「なんか、やつぱりこつちはちよっと時間の流れが東京と違って、いいですね」

ふとそんな言葉が尾崎の口からもれる。

「田舎だからね」

「半日、畑仕事で汗かいて風呂入って、早めに晩メシ食って、こうやって飲みにきて」

「定年したら、こつち来れば？」

「え？」

「土地なんか腐るほどあるんだし。あ、そうか、その頃にはもう、お義父さんたちいないかなあ。いや、……まあ引退してんのは確かだろうな」

「定年かあ、考えたこともなかったなあ」

「そりやそうだよ。尾崎くんなんて、これからが働き盛りなんだから」

「でも、どうしたんですか、急に定年後の話なんて」

尾崎は芋焼酎を舐めた。

「いや、別にどうってことはないんだけどさ」

桔平も氷に薄まったウイスキーを舐める。

「……この前、真朝が、自分が死んだら海に散骨してもらうことに決めた、なんて話しててさ」

「え？」

尾崎が大げさに驚くと、「いやいや、病気でもなんでもないよ。逆に健康すぎるくらいだから」と、桔平が笑う。

「……ほら、真朝つてさ、せっかちな所あるじゃん。とにかく先のことを決めたがるみたいよ。決めてると安心するみたいよ」

「それで、死んだら海に散骨ですか？」

「なんだって」

「でも、梶原家の立派な墓あるじゃないですか」

「そう、それにね、入りたくないらしいよ」

「どうして？」

「死んだあとくらいは、ここから離れて自由になりたいんだって。でね、俺には言うんだよ、あんたはうちの墓に入つてよつて。跡取りなんだからつて」

「夫婦でそんな話するんですね？」

「尾崎くんたち、しない？」

「たぶん、まだ一度もしたことないですね」

その時、桔平の携帯の着信音が鳴った。

「お、真朝が着いたみたい」

確認もせず、桔平が言う。

尾崎がトイレに行つた隙に、桔平が会計を済ませてくれていた。

「いつもすいません」

札を言いながら店を出ると、通り向かいにハザードを点滅させた真朝の車が停まっている。この時間、すでに国道一四〇号も車はほとんど走っていない。

「明日、天気大丈夫みたいよ。気温もそんなに上がらないみたいだから警報も出ないんじゃないかな」

車に乗り込むと、真朝が教えてくれる。

「あそこの河原、午前中は日陰だからいいよ」

助手席に座つた桔平が言う。

「お弁当作ろうかって言つたら、みんな、ピザの方がいいって」

車は空いた国道をかかなりのスピードで走つていく。尾崎は窓を開けた。少し蒸し暑い、それでも東京では感じられない冷えた山の匂いがする。

「どうすんだよ！」

追ってくる野上の声を無視して、尾崎はオフィスビルを飛び出した。目の前の大通りに出て、走ってきたタクシーに手を上げる。日盛りでアスファルトの上は四十度近いはずだが、不思議と暑さを感じない。

停まったタクシーに乗り込むと、「どうすんだよ！」と、すぐに野上も乗り込んでくる。

「水天宮までお願いします」

尾崎が頼むと、焦った二人の様子を察した運転手が、少し強引に車を出してくれる。

「どうすん……」

「だから、ここで俺たちが言い合ってたって仕方ないって」

また同じことを繰り返そうとした野上を、尾崎は制した。

「……とにかく日榮に行つて、話を聞いて。各部署に相談するのは、それからだよ」

日榮というのは、今案件で船頭役を務める大手建築コンサルタント会社である。

今になって尾崎の額から汗が噴き出てくる。

今朝、とあるアメリカの法律事務所から連絡が入った。実際には仲介している日本の弁護士からの連絡だった。

簡単にいえば、現在、尾崎たちが進めている都立多摩公園に建設予定の美術館の設計デザインに明らかな剽窃が見られるという告発である。

今回の新美術館建設については、尾崎たちの建設会社が国際的なコンペティションを行った。

建築規模がさほど大きくなかったせいか、海外からの参加はそう多くなかったが、それでも国内外から名だたる建築家がコンペに参加し、中には数年前にプリツカー賞を受賞したフランス人建築家の事務所もあった。

厳正な審査の結果、選ばれたのが甲斐宇童かいつどうという気鋭の建築家だった。まだ四十代前半だが、五年ほど前には銀座にある大手ブランドの自社ビルで国際的な建築賞を受け、大阪の心齋橋や仙台北一番町のシンボルとなるような商業ビルなど、大きな案件も多く手がけている。

もちろん審査は公正に行われた。東京都公園協会の理事が審査委員長を務め、審査を行った委員には大学教授や建築家など専門的な知識を有する人々が名を連ねた。

実は、このコンペの直後、尾崎はちよつとした不安を感じる話を耳にしていた。それは審査委員たちをわづらわためために催されたホテルの立食パーティーでのことである。

尾崎たちも接待要員としてパーティーに参加していたのだが、そんな中、あるベテランの建築家と大学教授が次のような話をしていたのである。

「結局、甲斐くんのデザインというのは、今の時代にピッタリと合ってるんだよね」

そう話すのは、世間にもその名の知れたベテラン建築家である。

「ただ、そうなると、どうしても他の今どきの建築家たちと、そのコンセプトやアイデアが被るかぶことがあるでしょう」

そう受けたのは、こちらもNHKで世界の有名建築物を紹介するレギュラー番組を持っている大学教授である。

「その通り。甲斐くんが那須に建てたホテルね。あれなんか、まあ、言ってしまうえば、ギリギリだと思えますよ。敢えてギリギリって言葉を使いますけど」

「ああ、あれは私もちょっと大丈夫なのかなとは思いましたね。だって、オランダ人のヤコブなんとかっていう若手建築家のデザインやコンセプトと、ほぼ同じでしょう」

「まあ、でも、そこが建築の難しいところで、剽窃やパクリなんて言い始めると、どの時点までのアイデアが、その建築家のオリジナルとして認められるかっていう、すごくデリケートな問題になりますからね」

「実際、そのヤコブくんの作品も自分のYouTubeで紹介してるだけで、実際にどこかに建ってるというわけでもないですしね」

「でも、そうになると、建てた者勝ちちんっていう、嫌な世界になっちゃいますけどね」

「うーん、でもまあ、甲斐くんの場合は、正直ちよつと多い。考えてみれば、デビュー作からその傾向はあって、よく言えば、器用」

「でも、やっぱり川立ちは川に果てますよ」

大手建設会社で働いてきた尾崎である。もちろんこの手の話も初めてではない。実際、こういうトラブルも多く、力関係にもよるが、ほとんどの場合は和解する。教授たちが言うように、建築デザインの剽窃や盗用というのは、なかなか立証できないもので、現実的に裁判で争うという事例はほとんど見られない。

慌てて乗り込んだタクシーが水天宮に近づいてきたところで、少し尾崎たちも落ち着いてきた。

道が空いていたのも一つ、日榮コンサルタントの担当者と連絡が付いたことも理由の一つである。ちなみに日榮の担当者も、すぐにこの件で審査委員だった大学教授に連絡を入れたところ、「まだ向こうの設計図が見られないので、早急には判断できませんけど、外観のデザインだけに関して

言えは、これくらいは偶然の一致と言えなくもないでしょうね。まあ、かなり厳しいのは厳しいですけれどね」との意見をもらったらしく、少しだけ安堵しているという。

「あーあ、今週はちよつとゆつくりできるかと思つたら……」
やはり少し落ち着いたらしい野上が、久しぶりに口を開く。

「……秩父、どうだった？ あつちの方が都内より暑いんじゃないの？」
野上に訊かれた尾崎は、「子供たち連れて溪流で遊んできたよ。久しぶりに川に入ったりして」と笑つた。

状況としては、そんな呑気のんきな話をしていないのだが、この狭い車内の空気を険悪にしたところでどうにもならない。

「そつちは？」

今度は尾崎が尋ねた。ふと口にしてみて、自分がかなりそのことを気にしていたことが分かる。

「こつち？……暑くて、一歩も部屋から出てないよ。メシはUber Eats。あとはずっとサッカー観てた」

「じゃなくて、久遠たちと食事行つたんじゃないの？」

「え？ 行つてないよ。だって、尾崎が行けないっていうから」

「だから、誰か別の奴誘えばつて送つたら、了解つて」

「ああ、あの了解は、尾崎が行けないなら、また今度つて意味の『了解』」

改めて野上に言われると、確かにあの「了解」はそういう意味にしか取れなくなる。

となると、桔平と行つたスナックで、今ごろ二次会かななどと思ひながら、野上からの連絡を待つていた自分が可笑しくなる。

日本橋浜町のビルに入っている日榮コンサルタントに到着すると、尾崎たちを予想外の人物が待っていた。

会議室を取ってますから、という担当者に案内されたブースの窓からは、きらきらと川面かわもを輝かせた隅田川が見下ろせる。その景色を眺めていた女性二人が振り返る。

「あれ」

「え？」

声を上げる尾崎と野上に、「お疲れさまです。この前はどうも」と、挨拶あいさつしてきたのは、久遠と、あの雷雨の日も一緒だった梅本潤子である。

「あれ、もう会われてます？」

日榮の担当者が不思議がる。

「先日、公園で偶然お会いして」

答えたのは久遠である。

「じゃ、紹介はいいですね。ちょっと待ってもらえますか。うちの担当者たちもすぐに呼んできますんで」

担当者が会議室を出ていく。

「お疲れさまです」

四人だけになると、誰からとなく、また挨拶を交わした。

「久遠さんたちはどうして？」

尋ねたのは野上である。

もちろんいづれ報告は行くだろうが、少し早すぎる。

「そちらに送られてきたものと同じものが、うちだけじゃなくて、スポンサーにも送られたんですよ」

答えたのは梅本潤子である。この前の豪雨の日は、壊れたビニール傘ばかり気にしていたが、その話し方のせいかな、かなり印象が違って仕事ができそうである。

「あららら」

野上が大げさに声を上げる。

業界の慣例で、これが建築家同士のことであれば、この手の剽窃や盗用問題は内々に処理できる可能性もあった。しかしここに何よりも世間体を気にするスポンサーが絡んでくると、まったく話は違ってくる。

「スポンサーって全社にですか？」と、尾崎は尋ねた。

「残念ながら大口の三社ともに」

頷いたのは久遠である。

「そうですかー。……で、各社の反応はどうなんですか？」

尾崎は尋ねた。

今度は梅本の方が、「良くはないですね」と、一つため息をつく。

「……もちろん、内々で解決できるのであれば問題ないんですけど、向こうサイドがさらに騒いだ場合、日本のマスコミに広まる可能性が出てくるでしょ。そうなると、さすがにこのまま進めるわけにもいかないですし、もし強引に進めたりすると、それこそスポンサー企業にとってはかなりのイメーჯダウンですからね」

梅本の話を受けて、

「世間って好きですからねー、こういう剽窃とか盗作の話題」

野上がそう口にしたところで、日榮の担当者たちがやってきた。

すぐにテーブルや椅子を準備して、車座になると、今朝方アメリカから送られてきたデータをみんなで覗き込む。

「うーん」

「これは……」

「さすがにひどいな」

口々にもれてくるのは、そんな言葉である。正直、素人目にも甲斐の設計デザインが剽窃や盗作と呼ばれて止む無しなのである。

その後、侃々諤々かんかんかくかくの話し合いが続いたあと、少し休憩することになった。

尾崎も会議室を出て、トイレの洗面台で顔を洗った。その足でリフレッシュルームに入ると、そこに久遠がいた。自動販売機で買ったコーヒースリッパを片手に、隅田川を眺めている。梅本はいないようだった。

「うちからも川が見えるよ。隅田川じゃなくて、荒川だけど」

尾崎もコーヒースリッパを買いながら声をかけた。

振り向いた久遠が、「川って街だよ。街の一部。でも、海って空だよ。空の一部」と呟く。

「海は空か。なんか分かる気がする」

「山の中の川もやつぱり街なんだよね。いや、村かな。どっちにしろ、人のもの」

「長崎にはこんな大きな川なかったもんな」

「海はどこに行ってもあつたけどね」

振り返った久遠は笑顔である。

***この続きは書籍でお楽しみください。**

本書は、日本経済新聞（二〇二五年四月一日～二〇二六年四月九日）の
連載に加筆・修正したものです。

吉田修一

1968年長崎県生まれ。法政大学経営学部卒。

97年「最後の息子」で文学界新人賞を受賞してデビュー。

同作が芥川賞候補となる。

2002年『パレード』で山本周五郎賞、「パーク・ライフ」で芥川賞、

07年『悪人』で大佛次郎賞と毎日出版文化賞、

10年『横道世之介』で柴田錬三郎賞、

19年『国宝』で芸術選奨文部科学大臣賞と中央公論文芸賞、

22年『ミス・サンシャイン』で島清恋愛文学賞、

25年映画「国宝」に関連して野間出版文化賞を受賞。

他に『怒り』『太陽は動かない』など著書多数。

タイム・アフター・タイム

2026年5月25日 第1刷発行

著者 吉田修一

発行人 見城 徹

編集人 石原正康

編集者 茅原秀行

発行所 株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話：03(5411)6211(編集)

03(5411)6222(営業)

公式HP：<https://www.gentosha.co.jp/>

印刷・製本所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料小社負担でお取替致します。

小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、

法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©SHUICHI YOSHIDA, GENTOSHA 2026

Printed in Japan ISBN978-4-344-04584-2 C0093

この本に関するご意見・ご感想は、

下記アンケートフォームからお寄せください。

<https://www.gentosha.co.jp/e/>

